

平成22年度 DV防止啓発講演会

安心できる家族をつくるために～DVと虐待をみつめながら～



日時 平成22年10月31日(日) 13:30～15:30

会場 こうち男女共同参画センター 3階大会議室

講師 信田さよ子(原宿カウンセリングセンター 所長)

1946年岐阜県生まれ。お茶の水女子大学大学院修士課程修了。臨床心理士。原宿カウンセリングセンター所長。アダルト・チルドレン(AC)コンセプトの先駆者であり、第一人者。

駒木野病院、嗜癮問題臨床研究所附属原宿相談室長を経て、1995年、原宿カウンセリングセンターを設立。アルコール依存症、摂食障害、引きこもり、ドメスティック・バイオレンス、児童虐待に悩む人たちやその家族のカウンセリングを行っている。

著書は「DVと虐待 家族の暴力に援助者ができること」「カウンセリングで何が出来るか」「加害者は変わるか」「母が重くてたまらない」「共依存 からめとる愛」「選ばれる男たち」「タフラブという快刀」「父親再生」他。



★はじめに

どうもきょうは皆さん多数ご参加いただき、ありがとうございます。

きょうのお話はDVと虐待ということなのですが、アルコール依存症をやっていると70年代、80年代から無数の妻たちが飲んだくれの夫に殴られ蹴られ、鼻の骨を折られ、耳の聞こえない人もいっぱいいるという状況を見てきました。摂食障害のお嬢さんたちから、半年ぐらい経った時に初めて、酔っぱらった父が毎晩のように布団の中に入ってきたんですとか、女性のアルコール依存症、薬物依存症の人たちは父から何度もレイプをされた話をするというようなことに出会ってきました。そして、家族の中の暴力というものにどうしても焦点を当てざるを得ないというところで書いたのが、2001年のこの『DVと虐待』という本です。

★DV加害者プログラム

2003年度から内閣府の男女共同参画局にDV加害者プログラムの研究班というのができて、

私はその中の一員としてカナダに行き、幾つか DV 加害者更正プログラムを見ました。その後で仲間と一緒にプログラムを始め、今日まで続けております。もう6年になり、参加した男性が60人以上になりました。

最初に、グループの中に座るまではやっぱりどきどきしていました。

第1回目、7人のグループでスタートしたのですが、そのグループに座った途端、私は、「あっ、これ、今までに経験ある」と思いました。精神病院のアルコール依存症のグループです。全く同じ雰囲気。つまり、みんな心の中で「俺はアル中じゃない」と思ってる。でも、「うん、うん」って言わないと退院できないから、みんなおとなしそうな顔してるけど、内心は「こんな病院に俺を入れやがって、あの女房」と思ってる。DV 加害者も全く同じ。その瞬間に私、「あっこれならできる」と思いました。

DV 加害者に 2004 年から関わるようになって、加害者について書いてみようと思って書いたのが、『加害者は変わるか？』です。虐待加害者、DV 加害者、性犯罪の加害者、あらゆる加害者といわれる人たちというのはどういう人たちで、そしてその人たちは果たして変わるのかという問題意識で書いたものです。

★母と娘

2008 年には『母が重くてたまらない』を出版しました。これは娘たちにとって母親がなぜ重いかという内容の本です。副題が『墓守娘の嘆き』と言います。DV と関係ないじゃないかと思われるかもしれませんが、実はつながっている。DV という言葉ができる前の女性たちは耐えるしかなかった。実家へ帰るわけいかないし、誰かに相談したら、「あなた、そんなもの、結婚したら普通だよ。女の人生、我慢でしょ。あなた、我慢が足りない。あなたが優しくないからだ」と言われた。歯を食いしばって耐えているうちに、たった1人の味方は娘であると、娘に対する猛烈な支配をする。娘のためにという常套句で、娘の人生を自分の思い通りにする。「あなた、老後は見てくれるよね」と、ストレートに言わず、「あーあ、私は老後どうなるのかしら」と言う。そういう母親と娘のカップルに注目をして書いた本です。

それと関連したのが、『ザ・ママの研究』という本。主な対象は、中学生ということになっております。『母が重くてたまらない』という本を出してから、AC のグループに来る女性たちがどっと増えた。そして、その人たちの話を聞いている時に、もっと小さい頃に、小学校の3、4年以降、思春期にさしかかった頃に、特に女の子たちは、世の中にはいろんな母親がいるんだということを知っていれば良かったんじゃないか、と思った。自分の生まれ育った家族と、自分が作った家族しか知らない。親戚づきあいもない。近所づきあいもない。このことが母娘関係にとって、ある種の危険性をもたらす。お母さんのことを苦しく思ったり、お母さんの介護をできないと思ったりする私が悪いんじゃないか、という娘の側の罪悪感を必ず生み出す。世の中の人みんなお母さんのことを敬い、お母さんのことは大事にして、お母さんの面倒は自分が見るものだと思っている中で、お母さんのことを悪く思ってしまう私って、なんていけない娘だろうというふうに思う。母娘問題の根幹にあるのはこの罪悪感です。

ですから、小学校高学年から中学校のうちに、お母さんっていっぱいあるんだよ、いっぱいタイプがあって、どのタイプにもそれぞれすごくいいところもあるけど、娘にとってすごく嫌な点もあるよね。それは全然不思議じゃないのですよということを知ってもらうために書いた本です。

★家族

家族って一体何ですかっていうと、これは100人100通りの答えが出てくると思います。どれが正当ということもありません。夫の見た家族、妻の見た家族、子どもから見た家族っていうのは全く違うということです。これを一致させる必要もないし、一致することはほぼないと思う。これが私の考える家族像です。

例えば、摂食障害のお嬢さんのお父さんからすると「自分は日本経済の上り坂の時にたくたになるまで働いた。海外勤務もして、自分なりに一生懸命いい父親やってきた。日本に帰ってきて、管理職について、少し余裕が出てきたと思ったら娘が摂食障害になっちゃった。自分からしてみると、ほんとに食べ物のない世界を知っているのに、なんで娘はあんなにたくさんの食べ物を食べて、おまけに全部吐いちゃうんだ。訳が分からない。苦勞を知らないからじゃないか、甘えているんじゃないか。自分が一生懸命やってきたのは、意志を強くして頑張ってきたからだ。だから、娘にも人生の目標を持たせて頑張らせれば、摂食障害なんてすぐに治っちゃうんじゃないか」と言う。

お母さんしてみると「私の人生は結婚してから大きく変わった。銀行に勤めていたら中間管理職の下までぐらいは行けた。ところが、当時は寿退社というのがあって、結婚したら大体退社しなきゃならなかった。退社して、時間ある限り良妻賢母でやってきた。海外勤務もやった。1隻の船に親子3人乗ってやってきた。そして、浮気もしませんでした。日本に帰ってきて、娘をいい大学に入れるために受験競争を戦わせました。ところが、高校に入った途端に娘が摂食障害になっちゃった。私のやってきたことは何だったんでしょう？」

娘からしてみると、「海外勤務の時に、お父さんはいつもお酒を飲んで、深夜帰ってきて、間違えたと言っちゃあ、ベッドにやってきて、抱きしめたり、顔中なめ回したり。パパやめてよと、一生懸命我慢して言うと、あっ、ごめんごめんとか言って、夫婦のベッドに戻っていく。そういうことが少なくとも週に1回あった。お母さんは、ほとんど毎日眠る前に絵本を読むように、お父さんに対する愚痴、しゅうとめの愚痴、自分の母親の愚痴を言って聞かせた。私は、もう母親の愚痴のゴミ箱みたいでした」と言う。

この三者三様で、どれがうそか、どれがほんとかという問いは成り立たない。どれもがその当事者にとっては、うそではない話だと思います。これをDVに置き換えたら、虐待に置き換えたらどうなるでしょうか。

最初から「私はDVを受けてる」という人は1人もいません。娘に問題が起きてやってくる。引きこもった息子の問題でやってくる。ゲーム、ネット依存の息子の問題でやってくる。

そのお母さんとお父さんの関係を聞くと、最初の第一声は「あの人ね、悪い人じゃないんです」と言う。最初に、何か言い訳するんですよ。よく聞けば毎週末とか、身体的DVを受けてる。

私たちのところに来る DV 被害者は子どもに問題が起きたことで、夫から妻への暴力が表面化するというタイプが結構多い

もう1つは「これって夫のDVかしら？」っていう疑問形でいらっしゃる方、もしくは夫婦関係がうまくいきませんというのでいらっしゃる方。夫婦関係がうまくいかないというのは大体自分が悪いんじゃないかと思ってカウンセリングに来るわけですけど、最近では、夫は発達障害じゃないかというふうに言ってくる。これはここ1、2年の、非常に新しいパターンです。DVをDVというふうにとらえると何か希望がなくなる。本を読むと、みんな離婚がいいと書いてある。相談に行くと、別居しなさいと言う。でも、別居できない。離婚もできない。あっ発達障害なんだと思うと、何かあきらめがつく。

つまり、子どもの問題の背景としてのDV、夫婦関係で困っていますという、よく分からない形のDV、あともう1つははっきりと自分はDVを受けています、これからどうしていったらいいでしょうかというような人がいます。この大体3つです。

実際に私たちはどんな援助をしているかという、DV被害者のグループカウンセリングは2種類あります。1種類はまだ同居している。これからも同居をしていくかもしれない。でも、夫のその行為はとでもつらい。子どもにもちょっと問題が起きかけている。非常に視点が流動的な、DVって言っちゃうと、えっ、そうすると私、被害者？夫、加害者？という人たちです。こういう人たちがDVについて勉強していただくグループ、心理教育的なアプローチのグループです。ここでは何を使っているかという、DV加害者プログラムで使う資料です。これは、暴力とは何か。どんな被害を与えるか。そして、子どもへの影響は何か。自分がやった暴力の責任をとるとはどういうことかというような加害者プログラムの柱になっていることを、そのまま妻たちの資料に使っている。自分がこれはやっぱりDVと認めている。これは自分が悪いわけじゃなかったというようなことが勉強しながら分かっていくわけです。

私は、どうするかという決断をできるまでに、すごい時間をかけるべきだと思ってる。迷う時は迷いましょうというふうに言います。迷っていることにいい悪いはありません。

最近ではPTSDという診断書がほとんど紙切れ同様に意味を持たなくなってきました。身体的暴力で、例えば、写メールであざが撮ってある、骨折したという証明がある、時には写真とその診断書がある場合はいい。しかし、私たちの(ところに来られる方の)特徴は、もちろん身体的DVもちょっとあるけど、主に精神的DVという方が非常に多い。知的になればなるほど、非常にすごい。洗脳タイプと呼んでいます。この家に起こることは自分が一番責任を持っている、だから、自分が考えているのが一番正しい。その通りにできないのは、君にどこか変な点があるからだと言う。妻の言動、家事、育児に対して批判的な、アプローチを繰り返す。すると、妻はだんだん評価の基準が夫になって、夫の視線、夫のちょっとした不機嫌そうな顔にビクビクするようになります。自分の行動が夫の行動時間ですべて左右されてしまう。

PTSDというのはPost-traumatic stress disorderといって、心的外傷後ストレス性障害というふうに言います。それはトラウマになるような出来事を受けた後に起きてくるさまざまな障害のことを言います。この人はPTSDですよというふうに精神科医に診断書を書いてもらおうと、それが

DVを受けてきたことの1つの証明になるのです。

ところが、この PTSD 診断が DV の被害者の裁判にほとんど考慮されないという事態ができています。明らかに虐待よりも DV は厳しいです。虐待はもう有無を言わせぬ事実がありますから。DV は大きく違い、多くの人の中にあるのは「お互い好きで結婚したんでしょ、セックスまでしたんでしょ、なのにそんなに加害者なんて何を言うの、あなたの方にも悪いことがあったんじゃないの？夫婦ってお互い様だよ」と言う。

このお互い様という言葉が一番使うのは、DV加害者プログラムに出てくる人全員です。男たち。この「お互い様」という言葉ほどくせ者はありません。もう1つくせ者の言葉は「コミュニケーション」という言葉。必ず「コミュニケーションが取れてないからよ」と言います。こういうふうにする人は女が多い。女が DV 被害者と言い募る女を差別し、女が女を批判する。

そういう意味では世の中の常識と言われている夫婦観を転換しなきゃいけない。その時に必要なのは、先ほど申し上げたように、家族というのは夫から見た見方と妻から見た見方がある。今までの家族観というのは、つまり、夫婦はお互い様でしょ、コミュニケーション取れば、うまくいくでしょ、妻のわがままよねというのは、実は男性の側の見方なんです。これは、同じことが性犯罪にも言えます。なんで大の大人が、一流企業に勤めている人が、小さい女の子の裸に触った時にいたずらって言うのか。皆さんはあまりお感じになってない、日常、空気にはなってると思うんですけども、やはり一般常識と言われているものは非常に女性に厳しいです。このことをよく、これは男の人を責めてるわけじゃありません。そういうふうになってることにもう1回目を向けていただきたい。

★DV 被害者と加害者

私たちが DV と言われているものを虐待と比較すると常識と戦わなきゃいけないんですよ。このことが DV 被害者支援の最も困難なところになります。被害者支援でよく言われるエンパワメントというのは、彼女たちを勇気づけるという意味です。本当に女性や妻たちの視点に立つのはどういうことかっていうことを常識と闘いながら考え抜くということが、被害者支援の基本だろうと思います。

実に多くの DV 被害者たちが自分を責め続けている。被害者のグループに来る人は、私は DV 被害者よ、夫は加害者だから悪いのよと思えない人たちです。調停で婚費を請求しながらも、ああ私のやり方がまずかったんじゃないかと思うとほんとに落ち込んだりする。こういう繰り返し。私が実はこういうことをすべて仕組んで、私のわがままで家族をバラバラにしちゃったんじゃないかという、被害者の加害者意識です。これが、DV 被害者のグループでは絶えず絶えず出てきます。周期的に出てきます。そのたびにモグラ叩きのように、「それはそうじゃありません。暴力というのはふるった人に 100%責任があります。理由は問わない。どんな理由であろうと、暴力を正当化するような理由はありません。言葉によって妻に伝えるということをしればいいにもかかわらず、殴ったり蹴ったり、大声を出したり、あとは女であることを否定したり、女であることを差別する。「お前、誰のおかげで食べてられるのか」っていう言葉、経済力を 100%握って

いる人はそれ言っちゃいけないですよ。それを言っちゃおしまいということを日常に言ってるわけですから、それは言った人に 100%責任があると、繰り返しレクチャーをして、もう1回その人の足場を固めるということをやります。

実は、彼女たちが自分を責める、ああ私のせいじゃないかって思う、それとまるで入れ子のように、DV 加害者プログラムに参加をしている人たちが、3回目ぐらいから噴出してくるのが彼らの被害者意識です。ことあるごとに、どれだけ自分がかわいそうだったか、どれだけ妻に暴言を言われたか。ある人は言いましたね。7回目ぐらいに「先生、僕、ほんとにこのプログラム来て良かったです。勉強になりました」。その次に、「先生、ほんとに僕の妻は DV 加害者でした。よく分かりました」って言ったんです。ガクッときました。加害者プログラムの細かい内容はきょう時間がないので言えませんが、毎回資料を配って宿題を出すんです。それを全部妻に当てはめてやってきます。自分のことじゃないです。自分は DV 加害者プログラムに来てるんだけど、妻に言われて来てるだけで、僕は妻のために、妻を勉強させるために来ているというふうに思っていたんですね。そういう人は珍しくないです。あとは、最初言ったように「お互い様ですから、先生」。彼らが二言目に「先生、要するに我慢すればいいんですね」。このグループで「我慢はしないでください。我慢をすると、次なる暴力になりますから、我慢をしないように」というようなことを言うわけです。そうすると、彼らは、そもそもこんなグループに来たくはなかったのに、妻が家を出て行ってしまって、こここのプログラムに出ないと、私は家に戻らないなんていうふざけたことを言うから嫌々来てやってると思ってます。ほんとは来たくないのに、会社終わってから、7時から飛び込みで来なきゃいけない、あーあみたいな感じ。言い換えると、加害者の被害者意識です。

ある時、ちょっと余談で「じゃあ、皆さん自分を責めたことありますか」って言ったら、「はあ、自分責める？ないない、全然ない」。聞いた時にびっくりしましたね。それに比べると、妻たちのあの自分の責め方。これはもうほんとに好対照ですよ。まとめのセッションに来た時に、いつも聞くのは「皆さんの精神状態をグラフにして書いてください」。ここ2、3年を書いてもらうと、ストンツと落ちる時がある。それは妻が出ていった時。その後もずっと低空飛行で、さらに落ちた時が DV 加害者プログラムに出始めた時。そのことを説明してもらって、みんな一緒に同じことを考えてます。DV 加害者っていうと鬼みたいな人がいて、何か自分みたいな人間がその鬼のような男の中に入って行って何かされるんじゃないかと思って、戦々恐々で来たら、背広着てる。あれ！？、普通の人っぽいなというのが驚きでしたって言うんですよ。

グループをやっていくうちに、どれだけ DV が妻に影響を与えるかっていうのを聞いて、また落ち込む。もう1つ落ち込むのが子どもに対する影響の回。私はそのことを聞いてる時に、希望がなくはないと思います。自分がやったことがこんなに妻や子どもに大きな影響を与えていたのかと思うとすごくつらくなっちゃうということは、彼らのある種の良心、希望を表していると思います。ですから、DV の加害者プログラムをやっている時はお互い様と言われると蹴ってやろうかって思う、だけど、彼らなりに、自分がやったことによって妻がそんなに苦しんでいる、子どもたちがすごい傷ついているということを知ること、彼らに何らかの影響があるということ

す。

★日本の現状

正直申し上げますと、加害者プログラムが12回で十分だなんて私は1mmも思っていないです。カナダもアメリカも最低でも半年、一般的には毎週1回8カ月参加しなきゃいけない、と言われている。私たちは3カ月12回というふうにしている。なぜかという、日本はDVは犯罪ではありません。DV罪というのはありません。つまり、妻を殴って肋骨3本折って片耳聞こえなくなったとしても、妻がいいです、いいです、私、我慢しますって言って告訴しなかったら犯罪になりません。夫はそのまま一般的な健康な市民でいるということです。妻が告訴するぐらいにヘビーですごくつらいことはないですよ。子どもたちから、お母さんが告訴したからお父さん逮捕されたじゃないか。親戚から何て言われるんだろう。夫の復讐が怖いとなる。妻たちの多くは、集計によれば3割か4割しか告訴してないというのが内閣府の統計であります。6割はそのまま黙っているということです。

諸外国は逮捕されます。そうすると裁判所で、裁判したところが命令してDV加害者プログラムに出なきゃいけないです。出ないと、もう1回裁判所に戻される。実刑という可能性もあります。彼らは裁判所命令という強制力で参加しています。だけど、日本は「もしあなたが参加してくれなかったら別居します」という妻の命令によって来る人が9割方です。残りの1割が自発的にインターネットを見て、別れた妻ともう1回やり直したいから来る。強制力はないです。僕嫌だ、もういいやと思っちゃえば、いつでもやめてしまうことができる。そういう人たちに8カ月間来てくださいって言ったら、まず無理なんです。だから、私たちは3カ月でとりあえず表面的なおさらいをする。

★世代連鎖は男性の問題

だんだん分かってきたのは、そういう両親を見て育った子どもに対する極めて重篤な影響です。これについては、そういう子どもを対象にしたプログラムがカナダやアメリカでも開発されて、私たちも去年と一昨年と2年間やりました。びっくりしたのは小学校1年生から3年生のDV被害を受けた母子を対象にしたグループ。お父さんとは別居、離婚していることが条件のグループをやったのですが、何という男の子の暴力性なんだってということです。課題活動をやって、おやつを食べて、自由活動をやるって1時間半か2時間のプログラムですが、自由遊びになった時の殴る、蹴る。男のファシリテーターがいたら、あざだらけです、毎回。その男の子たちにとっては親愛の情なんです。先生大好きだよっていう代わりにぼんぼん殴ったりする。暴力というものがコミュニケーションのツールになっている。女の子は結構遊ばなくて、解離しちゃってぼーっとしてる子とか多かった。もっと怖いのは、その子たちが学校ではきちんと適応している子でいるってことです。そのプログラムに来ると、安心していろんな行為が表出する。それがあまりにもすごかったので、私たちはほんとにショックを受けました。これは、実はカナダも同じです。カナダに勉強に行った時にそうだって言われて、日本はどうだろうって言っ

たらやっぱり日本も同じでした。

それを見て、世代間連鎖、世代連鎖というのは実は母から娘へというものはもちろんあります。ないとは言わない。しかし、母と娘は自覚をしている。自分で出産というものを経験して母乳を与え、おしめを替えながら、ああ私どうやって育てられたのかなということを一瞬でも考える。その時に、世代連鎖というものに気づく。私は親からこんなことされてないとか、こんなことされたなっていうことを振り返るきっかけがある。

ところが、男性はほとんどない。とすると、その DV 被害の母子のプログラムで男の子たちに見られたその激しい暴力性というものが、思春期を過ぎて大人になってどうなるのか。中には、自分の父がアルコール問題があって、お母さんに暴力ふるってて、自分は絶対に結婚したら妻に、酒も飲まないし暴力もふるわないぞという人もいます。

だけど、この『父親再生』にも書きましたが、多くの息子たちは思春期を過ぎて大人になると、ある時、突然に「俺、親父の気持ちが分かる」って言い出す。「親父も大変だったんだな」って言った途端に、お父さんの歩いたと同じような道を歩き出す。なぜこう思うかという、DV 被害を受けた母子の、あの息子たちの暴力性と、加害者プログラムに出ている人たちの DV の目撃率が9割を超えます。参加者の9割が、お父さんがお母さんに DV をふるっている。そうすると、世代間連鎖というものは実は母から娘というよりも、父から息子へというふうに言った方がいいのではないか。

ですから、男性も自分の父親がどんな父であったかを振り返る必要がある。自分がどういう男になっていくのかということと自分の父がどんな男だったか、どんな父だったか、夫だったかということが非常につながっているということを考えていただきたいと思います。

そこで、一応の区切りをつけて、あとは欲張ったテーマなので話しきれなかったこともありますし、皆さんから感想とかご質問をいただいて、30分は時間を取りましたので、どうぞ自由に手を挙げて聞いていただきたいと思います。